様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８ＫＫ０３３４

研究課題名（和文）アングロ・サクソン時代の文献に見られる「世界」観

研究課題名（英文）From East to West: The Idea of the World in Anglo-Saxon England

研究代表者
唐澤　一友（Karasawa, Kazutomo）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：００３４７２８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　12,000,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：5名の共同研究者との共同研究を行い、その成果を随時研究発表や論文として発表し、また、共同研究者以外の専門家をも交えた形で企画した国際シンポジウムや、国内の学会におけるシンポジウムにおける議論により研究をさらに深めることが出来た。最終的には、共同研究およびシンポジウムの成果をまとめた論文集をベルギーの出版社Brepolsの出版する古英語文学専門のシリーズ Studies in Old English Literature の一冊として出版することが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究はアングロ・サクソン時代における世界観について、かなり幅広い視野で考察したものであり、これはこの時代の文献研究全般に広く貢献する可能性が大いにあるものだと言える。その主だった成果は国際的な専門誌や上記の論文集として、入手が容易な形で世界の研究者に向けて発信されており、そういった意味でも当該分野の研究に寄与する可能性が大いにあるものだと言える。

研究成果の概要（英文）：Based on the results of this collaborative research project carried out with five collaborators at the University of Oxford, I read some papers at conferences and published several articles. We also held two symposia inviting several external collaborators, and published a collection of essays in a series specialising Old English literature, Studies in Old English Literature, published by the Belgian publisher Brepols.

研究分野：古英語文学

キーワード：古英詩　アングロ・サクソン学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

本研究は、基課題である古英語格言詩 *Maxims I* および *Maxims II* に関する基盤研究（C）の研究を一層深めることを目的としたもので、これらの作品の背後にあるアングロ・サクソン時代における世界観について総合的に研究しようとしたものである。当時の世界観の全体像という、一人で取り組むにはあまりに大きな問題を扱う研究であるため、アングロ・サクソン時代の文学、文化、歴史等に造詣の深い海外の研究者複数名との共同研究という形で研究を行うべく、共同研究者達の在籍する英国オクスフォード大学において、一年間共同研究者達と密に連絡を取り合いながら研究を進めるという計画を立てた。

２．研究の目的

本研究の目的は、古英語格言詩の背景にあり、これを支えるアングロ・サクソン時代の世界観の全体像を把握することであり、それにより古英語文学史の中における格言詩の位置づけを把握するとともに、これをいかに捉え理解すべきかといった問題に光を当てようとするものである。古英語文学史の中の個別具体的な作品の詳細に関する研究である基課題はミクロの視点に立ったものであるのに対し、本共同研究は同時代の文学伝統やそこに反映された世界観の中で研究対象の格言詩をどのように捉え理解すべきかというマクロの視点に立ったもので、ミクロの視点に立った基課題をマクロの視点から有意義に補う目的で行われるものである。

３．研究の方法

アングロ・サクソン時代の世界観の全体像の把握という非常に大きな問題を扱う本研究では、当時の文献に広く目を配る必要があることから、複数の共同研究者と連携して研究を進めるべく、この分野に造詣の深い研究者が多く所属するオクスフォード大学に研究代表者が一年間在籍し、研究を行うこととした。同大学英文学科に所属する 5 名の専門家、Dr Mark Atherton, Dr Francis Leneghan, Dr Helen Appleton, Dr Daniel Thomas, Dr Hannah Bailey、を共同研究者とし、以下の三つの観点からの研究を分担して行うこととした。

（1）地理的な観点からの「世界」観
（2）自己と他者、人間と自然との関係性といった社会的・環境的観点からの世界観
（3）宗教的な観点からの世界観

これらの分野のうち、研究代表者と Dr Appleton は（1）と（2）、Dr Atherton, Dr Leneghan および Dr Bailey は（2）と（3）、 Dr Thomas は（1）と（3）を担当することとし、各自自分の担当分野について、それぞれ研究を行うと同時に、共同研究者同士で定期的に会合を持ち、研究の進捗状況の報告や意見交換等を行い、また、共同して国際シンポジウム、International Medieval Congress におけるセッション、および論文集の出版の準備をすることで研究を深めることとした。国際シンポジウムや論文集には、共同研究者以外の専門家を複数招聘すべく、共同研究者以外でこの分野に造詣の深い研究者とも連携しながら研究を進めることを目指すこととした。

４．研究成果

上記（1）から（3）の三分野について、本研究を通じて以下のような知見を得ることが出来た。（1）については、移動や輸送の手段が非常に限られていたアングロ・サクソン時代においては、

イングランドから遠く離れた地についての知識が乏しかったと考えられがちであるが、実際にはアフリカやアジアにまで及ぶ広範囲の地域への旅をする者もおり、また、そういった遠隔地からイングランドにやって来る者もおり、さらには、遠隔地からもたらされた様々なものがイングランドにおいても手に入ったようであり、遠く離れた土地についての情報は（少なくとも知識層の人々の間には）かなり豊富にあり、またこれに思いをはせる者も少なからずいたようだということが明らかとなった。主だった古英詩の舞台の多くが遠隔地であるということや、*Widsith* や *Solomon and Saturn* 等のように、様々な遠隔地への旅のことが扱われた作品などにもそういった当時の状況が反映されているものと考えられる。

（2）については、自己と他者、あるいは人間界と自然界といった、一見相対する関係にあるように見えるもの同士について、そこに対立や相違点を見出そうとする傾向がある一方で、そこに近親性や類似性を見出そうとするもう一つの傾向もまた顕著にみられるということが明らかになった。例えば、キリスト教以前の時代の他国の歴史とキリスト教時代になってからの自国の歴史との間に連続性を見出そうとする translatio imperii という考え方の背後にもそのような傾向が反映されている。あるいは、人間の繁栄や衰退、生死を木のそれと比較したり、人間界の不和や困難な状況を荒れ狂う海のような自然界のものとの類推において捉えようとしたりといった文学的な表現方法にもこのような傾向を見て取ることが出来る。

（3）については、キリスト教以前の古代から伝わる世界観、つまり、世界はアジア、アフリカ、ヨーロッパからなるという世界観が、キリスト教時代においては旧約聖書の記述に従い、これら世界を構成する三要素がそれぞれセム、ハム、ヤフェトおよびその末裔と関連付けられることで存続したが、その一方で、キリスト教時代においては、キリストの架かった十字架の四つの端がそれぞれ世界の東西南北の端に対応すると考えられ、それによりキリスト（あるいはその十字架）が世界を抱擁しているとする、世界を四分割して捉えるような世界観が新たに発達した。アングロ・サクソン時代においては、この二つの世界観のいずれもが流通していたが、中にはこの両者を融合したような例も見受けられることが分かった。

共同研究により得られたこれらの成果は、共同研究者以外の研究者も交えて行われた国際シンポジウムにおいて発表・議論され、また、そのシンポジウムにおける議論に基づく論考を収録した論文集としても発表することが出来た。当初予定していた英国リーズ大学における International Medieval Congress でのセッションについては、コロナ禍のため学会自体が中止となり実現しなかったが、その代わりに、日本英文学会において本研究の成果の一端を踏まえたシンポジウムを行うことが出来た。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 唐澤一友	４．巻 -
２．論文標題 アングロ・サクソン時代の「世界」観	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中世英語英文学研究の多様性とその展望	６．最初と最後の頁 105-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 唐澤一友	４．巻 -
２．論文標題 What Has Christ to do with Wyrd in Maxims II 4b-5a?	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Studia Neophilologica	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00393274.2020.1731707	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 唐澤一友
２．発表標題 “Human and Non-human Worlds in Maxims I and Maxims II”
３．学会等名 日本英文学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 唐澤一友
２．発表標題 “A Symbolic Interpretation of the Crucifixion and the Idea of the World in Anglo-Saxon England”
３．学会等名 Seminar Series of the Medieval and Renaissance Research Centre（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 唐澤一友
２．発表標題 The Idea of the World Reflected in AElfric’s Description of the Crucifixion
３．学会等名 From East to West: The Idea of the World in Anglo-Saxon England, An Online Symposium（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 唐澤一友
２．発表標題 The Structure and Nature of Maxims II
３．学会等名 Spanish Society for Medieval English Language and Literature（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Mark Atherton, Kazutomo Karasawa, Francis Leneghan	４．発行年 2022年
２．出版社 Brepols	５．総ページ数 440
３．書名 Ideas of the World in Early Medieval English Literature	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

英国	オクスフォード大学			